

仏語表現黒人アフリカ文学管見（2）

—— センベヌ・ウスマンの小説 ——

恒川邦夫

1

1978年、あるインタビューアーの質問に答えて、センベヌ・ウスマン⁽¹⁾は語っている。

1923年、セネガル南部のジガンショ⁽²⁾ーの貧しい家に生まれたわたしは、これまで、転々と職を変えてきました。その数は36にも及んでいます。漁師をやり、石工になり、機械工になって、それから殆んど10年間にわたってマルセイユの港で沖仲仕をやりました。マルセイユ時代には組合活動にもうちこみました。⁽³⁾

『シネアスト⁽⁴⁾ センベヌ・ウスマン』の著者ポーラン・スマヌー・ヴィエイラによれば、センベヌは戸籍上1923年1月8日ジガンショー生まれとして届け出られているが、実際はその一週間前の1月1日生まれということらしい。父親はレブー（Lébou）族で、漁師であった。骨惜しみをしない働き者であったが、貧しかった。母親についてはつまびらかにしないが、父親が一人の女性と長続きしない人であったようで、ウスマンの母親とも離別していたため、少年は継母の監督下におかれていた。しかし、その継母と折合が悪く、家にいても面白くないため、いきおい少年は外に出て、仲間と町中をほっつき歩くようになる。漁師の父親は息子を悪い仲間から引き離すべく、一度はダカールの伯父さんのところへ少年を送るが、手に負えないいたずら小僧ぶりにたちまち送り返されてしまう。ダカールから送り返された少年は、今度は、同じカザマンズの町マルサスム（Marsassoum）に住む、生母の長兄にあたるアブドゥー・ラマヌ・ディオップというもう一人の伯父のところへ送られる。そしてこの伯父さん

が、ウスマン少年の精神形成に大きな役割を演じた。ディオップ伯父さんは識字者^{レットレ}で、1922年にマルサスムの町の最初の学校教師として迎えられた人物であったが、当地のフランス人行政官と衝突して失業、余生をいわば晴耕雨読の人として送った。ウスマン少年はこの伯父さんから最初の教育の手ほどきを受け、眼を広く精神世界へ開かされた。1935年にその伯父が歿すると、翌36年、少年は再びダカールへ行き、当時の植民地行政における現地人の登竜門である教育免状 (certificat d'études) 取得の準備を始める。13才であった。

しかし、少年のこの野望はあえなく潰えさることになる。準備を始めてほどなく、校長先生にこぶしを振りあげた罪で放校になるからである。一度ひとつの公立学校をしくじれば他の学校の門をたたいても無駄であった。過去をかくして、新入生として受け入れてもらおうと思っても、年齢制限にひっかかる。神父の経営する私立学校への道は費用がかかり、貧しいウスマン少年にはもともと閉ざされた道であった。かくしてセンベヌ・ウスマンは、以後、学歴とは無縁な人生を送ることになる。⁽⁵⁾

14才で学校と決別したセンベヌは、その後、生きるための身すぎ世すぎで、様々の職に就くが、1956年に33才で最初の小説『黒人沖仲仕』*Le Docker noir* を発表するまでの20年間はおよそ三つの時期に分けてみるができる。

第1期は比較的安定した戦前のフランス統治時代のダカールにおける模索時代である。兄弟に機械工がいたので、その手引きで、機械工になろうとしたが、肌に合わず、石工に転向した。それはまた、仕事が終わると、仲間と徒党をくんで遊びまわった時代でもあるが、反面、知識欲も旺盛で、夜学にも通った。青春特有の不安定な精神状態からミスティシズムに走り、回教徒となって頭を剃り、祈り三昧の生活にふけたこともあるという。

続く第2期は2次大戦の動乱とド・ゴール將軍指揮下のフランス解放植民地軍への応召・転戦・除隊という1942年から46年までの波乱に富んだ時期である。ニジュールからチャド、北アフリカからドイツのバーデン・バーデンに至るまで転戦した苛酷な軍隊体験は、その地理的広がりひとつを取ってみても、センベヌの世界をそれまでとは比較にならない広大な世界に開いたはずである。1947年、ダカールに戻って除隊になった翌年、彼はダカールとニジュールを結ぶ鉄道の大規模なストライキに参加する。「わたしはなにもすることがなかった。なにかしなければならなかった⁽⁶⁾」と彼は後にその動機を説明しているが、今日歴史的にみると、このダカール=ニジュール鉄道のストライキは6ヶ月にわたって、事実上フランス語圏西アフリカ全域をまきこんだ大ストライキであって、アフリカ労働史上に大きな足跡をのこした出来事である。

彼はこのストライキを主題にした三作目の長篇小説『神の木^{こいつば}端たち』 *Les bouts de bois de Dieu* を1960年に発表するが、実人生においてもこのストライキは第2期の軍隊生活と戦後の第3期を結ぶ重要な蝶番いの役割を果たしている。

第3期は、戦後、ふたたび祖国を離れてフランスに渡り、長くマルセイユの港湾労働者（沖仲仕）として働く時期である。戦争とストライキはアフリカの植民地にも新しい空気を吹きこんだが、宗主国と植民地の基本的関係がただちに変わったわけではない。軍隊生活という形であれ、外の世界を知ったセンベヌにとって、中心^{しんしん}がどこにあるかはみやすい道理であった。新しい時代の流れを肌で感じ取るためにも中心に近付かねばならない……。あるいは人生を今後に期す25才のセネガル青年にとって、動機は一層単純であり得ただろう。閉鎖的な植民地経済の中では見出し得ない仕事のチャンスが、宗主国の高度に発達した産業社会の中では与えられるかもしれないという期待——宗主国にやってくる大多数の植民地出身労働者が等しく抱く期待——それがいかに現実によって苦々しく、残酷に裏切られる運命にあらうと、その期待一つでも宗主国フランスは若者を出奔させるにたるだけの魅力を持っていたのだ。1948年、彼は密航者としてダカール港を出航し、同じ密航者の多くが航海中に発見され、カサブランカで下船させられたのをしりめに、うまうまとマルセイユまで正規の乗客になりおこせした。マルセイユから陸路パリに着くと、季節は秋で、すでに気温が下がり始め、屢々雨が降った。シトロエンの工場です3ヶ月働いたが、結局、寒さに耐えられずマルセイユに舞い戻ったのが49年の初頭といったところだろう。はじめ、製錬所に職を得て、製錬工として一人前になるべく、職業学校の製錬工速成科に入って研修を受けるところまでいくが、結局、眼を悪くし、医者^{いしや}の勧告で、その道にすすむことを断念する。そして仲間たちが彼のためにみつめてきたのが沖仲仕の仕事だった。かくして、ほとんど10年におよぶ沖仲仕の生活が始まるのである。

マルセイユのアフリカ人コミュニティの一員となり、沖仲仕として暮す彼がいかにして小説を書くようになったのか、センベヌ・ウスマンは84年の春、国際交流基金の招きで来日した際、岩波ホールの高野悦子とのインタービューの中でこう語っている。

沖仲仕の組合には立派な図書館がありました。わたしは独学でフランス語を学び、その図書館にある小説を手あたり次第、むさぼるように読みました。(・・・)とところがある日、黒人アフリカの作家による小説が一冊もないことに気がついたのです。それまで自分が小説を書くようになるなどとは一度だって思ったことがなかつ

たのに、一冊もないことが解ったとたん、突然、自分が書こうと決意したのです。⁽⁷⁾

素朴な答えであるが、いつわらぬ当時の実感であったかもしれない。ただここで歴史的な背景について少しふれておく必要があるだろう。世界的にみれば、黒人文学はアメリカのニグロ・ルネッサンスの作家たちの活躍によって隆盛であった。フランス語表現の黒人文学も、カリブ海出身の作家たちによる成熟した表現を持っていた。その一人エメ・セゼールはグワドループのダマと共に、セネガルのサンゴールと結んで、新しい黒人文学の運動を30年代のパリで展開していた。いわゆるネグリチュード運動である。1946年にはパリで『プレザンス・アフリケーヌ』誌が創刊されている。さらにセンベヌの処女作『黒人沖仲仕』が上梓される1956年には『プレザンス・アフリケーヌ』誌の創刊者アリウヌ・ディオップによって、第一回世界黒人作家・芸術家大会がソルボンヌで開催されている。⁽⁸⁾ こうした状況は、「自分で小説を書くようになるなどは一度だって思ったことのない」センベヌに小説の筆を執らせることになる歴史的背景として無視できないものと思われるが、その反面、ネグリチュード運動が文学運動としては主に詩人たちの運動であったことと、その中でアフリカを代表するサンゴールの格調高い一種の普遍主義が、必ずしも、センベヌのような労働者の生活感覚・現実感覚には強く訴える力を持たなかったことも忘れてはなるまい。よきにつけ悪しきにつけ、ネグリチュード運動は国際的な運動であった。しかしそれだけそれは言わば顔を外に向けた運動であって、考古学や人類学の最近の成果をふまえ、歴史の中に埋もれた黒人文明や文化について語り、ひいては人類の文明史・文化史全般に関わる本質論にまで及ぶその語り口は、そもそもアフリカの一般大衆に向けられたものではなかった。センベヌがアフリカ人の手になる小説の不在をひとつの欠如と考えたとき、それは恐らく単に文芸ジャンルとしての小説の不在を指しているのではなく、20世紀のまっただ中に、固有の過去を背負い、様々な矛盾にみちた現在を生きているアフリカ人の大衆の素顔を映し出し、直接アフリカ人自身に語りかけ、彼ら自身の問題の所在を認識させ、未来を模索させる試みがいまだ一人のアフリカ人によってもなされていないことに対する自覚、ひいては反省にあったと思われる。もっともこうした意識がただちに具体的な小説作品として成熟した表現を得るわけではないながら、次第に結構をととのえてくるていの結晶体にはほかならない。

2

センベヌ・ウスマンの処女小説『黒人沖仲仕』⁽⁹⁾ *Le Docker noir* の筋立てはおよそ次の如きものである。

ジャウ・ファラ Diaw Falla という作家志望のセネガル人の青年が沖仲仕として日銭を稼ぎながら、マルセイユの黒人街に暮している。日雇い労働なので、毎朝、仕事にありつくためには朝早くから事務所の前に並ばなければならない。仕事にありつけばありついで、重労働なので、夕方には体がボロのようになってしまう。しかし仕事がついとって文句を言えば、班長ににらまれ、明日からやとってもらえなくなるだろう。そうして一日の辛い仕事を終えて帰り着くところは、黒人街の安ホテルの一室である。一角に鉄製のベッド、その足元にビデと洗面台、他の一角に破れ鏡のついた衣裳ダンスと食卓用テーブル、テーブルの上には埃をかぶった石油コンロが一つ、入口のそばに机がもう一つと柳細工の椅子が二脚……それが殺風景なその部屋の家具調度の一切である。

青年には同じ黒人街に住むカトリーヌという恋人がいる。カトリーヌはニューカレドニア島から、幼い頃、母親にフランスにつれてこられた混血児で、今は同じ黒人街の一角にアフリカ人の養父とともに住んでいる。養父は暴君で、娘がジャウ・ファラのような男と交際するのを嫌っている。別のもっと条件のいい男と強引に結婚させようとしている。およそ八方ふさがりの状況の中で、唯一の希望の光はジャウ・ファラが書きあげた『奴隷船シリウス号の最後の船旅』という小説である。もしその小説が世に認められたら、カトリーヌと結婚し、未来のない沖仲仕の生活から救われるとファラは思っている。彼はその原稿を持ってパリに行き、出版社をたずねまわすが、どこもおいそれと引き受けてはくれない。自費出版という場合ですら、法外な金を要求される。思いあまってカルチエ・ラタンに住むギニア人のダンサーの友人をたずねると、思いがけず、一人の女流作家を紹介してくれる。ジネット・トンティザーヌというフランス人の女流作家である。数日後、友人の口利きで、ジャウ・ファラは女流作家とサン・ミシュル通りに面したカフェ『プチ・クリュニー』で会う。彼が持参した原稿をみせると、トンティザーヌは大いに感心した様子で「家にいらっしやい、その方がゆっくり話せるわ」と言うのである。二人を紹介したギニア人はその後パリでファラに三度ほど会う。一度はファラが一人の時、ファラの方から「彼女は信頼できる人物か」と訊いてきたので「大丈夫だ」と答えた。二度目は女流作家と二人づれで黒人たちのダンス・パーティーに来ているところで、本の話はどちらからもしなかった。

三度目に会った時は、ファラが「マルセイユに戻る、小説が出版された時にまた来るつもりだ」と言ったので、出版のあかつきには自分にも一冊献上してほしいと答えて別れた。

さて、マルセイユに戻ったファラには、その後、女流作家から二度ほど短い便りがあっただけで、季節はめぐり、ふたたび春である。ファラは、春の休みになったら、出版の件がどうなったか訊きに、もう一度パリに行こうと思っている。その矢先に彼は仕事仲間の家庭に食事に招かれ、食後のコーヒーを飲みながら議論に熱中しているうちに、たまたまそこに居あわせた女主人の妹（白人）の口から驚くべき事実を知る。

—ここに來るとき、本を一冊買ったの。今年の文学大賞を取った本なんだけど、奴隷貿易のことをテーマに書いているわ。

—ほほう、とジャウは言った。僕もそういうのをちょっと書いたんだがな。

—作者はジネット・トンティザーヌという人よ。

—なんだって？ ジャウは腰をおろしながら、聞こえなかったみたいに大声をだした。

—そこに持っているから、よろしかったらお見せするわ。⁽¹⁰⁾

ダニーというその女性がさしだした本に目を通すと、ジャウ・ファラは血相を変えてとびだして行く。その足で汽車にとび乗り、パリにやってきた彼は女流作家のアパルトマンに直行するが留守である。心当りを探して、ようやくサン＝ジェルマン＝デ＝プレの地下酒場の一つ『ベルゴラ』に彼女の姿をみつけた彼は、そのままにも言わず、彼女のアパルトマンの入口で帰りを待つ。やがて帰ってきた彼女はファラの姿をみて、あっと驚くが、ファラは大声をあげさせないように彼女の口に手をあてて、鍵をあげさせ、中に入る。ちょっとした手違いでこうなってしまったの、その事は手紙に書いたのにその手紙が戻って来てしまったの、とにかくお金をあげるから、今手持のこれだけではなくまた後から送るから乱暴しないでちょうだい、とかなんとか言い逃れようとする彼女と、沖仲仕のようなその日暮しに甘んじながらいのちがけで書いたものを横取りして人をなんだと思っているんだ、^{ノワール}黒人だと思って馬鹿にしたな、今さらお金なんか貰ったところでどうなるものでもない、どうせ自分が出て行ったらすぐさま警察でも呼ぶんだろう、あの小説は自分とフィアンセの唯一の希望の星だったのでおまえがすべてを台なしにしてしまったと激昂する彼がもみあううちに、彼女は家具の角に頭を強打し、くずれ落ちる。女流作家が倒れて動かなくなったのをみたファ

ラは恐ろしくなり、アパートマンを出て、混濁した意識のままリヨン駅から夜汽車に乗ってマルセイユに舞い戻る。そしてその五日後に、絶望して安ホテルの自室に逼塞しているところを女流作家の殺人容疑者として逮捕されるのである……。

*

こうした筋立てを作者は三部構成の小説に仕立てあげている。第一部では、息子が異国で殺人事件の容疑者として捕えられたというニュースを聞いてとまどう祖国アフリカの母と親族たちの様子を皮切りに、マルセイユの黒人街で妊娠7ヶ月の体で不安な日々を送るカトリーヌの様子を語ったあと、ジャウ・ファラの裁判風景が描かれる。続く第二部で回想風にジャウ・ファラのマルセイユにおける沖仲仕生活の春秋と事件にいたるまでの経過が描かれ、最後に、第三部で終身懲役刑の宣告を受けた主人公の獄中からアフリカの伯父にあてた手紙という形で、人種偏見やプロレタリアートの抑圧、さらには、テクノロジーの人間支配を生みだした西欧文明が告発されて終るのである。

『黒人沖仲仕』は未熟な作品である。その未熟さは筋立てや盛りこまれた主張の輪郭の明確さに対して、細部の肉付けが薄すぎることにまず認められるだろう。裁判風景がいかにもこしらえものでリアリティーを欠くのは単なる小説家としての技術不足であるとしても、筋立てとしてはもっともふくらみを持つはずの女流作家と主人公との関係がいかにも肉付けとして稀薄である。ジャウ・ファラを性愛の対象としつつ、その作品を盗んで自分の著作として発表するパリの女流作家という主題はそれだけで十分ロマネスクな想像力をかきたてるものであるが、小説ではごく表面的に素描されているにすぎない。そしてあたかもそうした個々の主題の掘下げの不十分さを補うかのように、次々とさまざまなモチーフが導入される。冒頭のアフリカの母と周囲の人々の独得な心の動き、回想部分におけるマルセイユの黒人ゲッターの人間模様、マルセイユの名士の娘が黒人青年を愛して妊娠し、それを知った母親がむりやり墮胎させたため娘が死んでしまうというエピソード、あるいは冷たい雨が降り続いて沖仲仕たちの仕事が耐え難いものとなった一日、休憩時間を要求して会社側に立つ黒人班長と大喧嘩する一幕、どれひとつとっても然るべく掘り下げられていれば、それぞれが一篇の小説の主題を構成したと思われるモチーフが無雑作に羅列されている。

しかし『黒人沖仲仕』の本質的欠陥はそうした多少なりとも技術的欠陥に帰せられるべきものではなく、実は、ジャウ・ファラという主人公自体の設定のあいまいさ、主人公の生き方そのもののあいまいさにあるのだと言うべきだろう。確かに、作者が

主張するように、マルセイユの黒人ゲットーに住むアフリカ人たちは長年にわたるフランスの植民地政策の犠牲者であるかもしれない。また白人・黒人を問わず、沖仲仕のような仕事に従事する人々は、劣悪な条件の下で働く搾取された労働者であるだろう。作中に描かれている、1901年にフランスにやってきて35年もの間、下級船員としてフランスの船会社のために働き、二度の大戦時には兵卒としてかりだされながら、戦後の混乱・不況下で邪魔者扱いされ、退職金も失業手当も支給されない老黒人の怒りは当然である。⁽¹¹⁾しかし主人公ジャウ・ファラは同じゲットーに住み、同じ不安定で条件の悪い労働に従事しながら、二重の意味でそうした老黒人とは運命を共にしていない。第一に彼は若く、未来はまだ彼の手中にあるのであり、彼が祖国を離れてフランスにやってきたのは自らの選択によってである。第二に彼の野心は小説家になることであり、その未来はもちろん約束されてはいないが、沖仲仕としての生活があくまで仮の姿であることは、彼の中で、明確に意識されている。マルセイユの黒人ゲットーの生活描写がどことなくお座なりであり、そこに姿を現わす人物像もどことなく影が薄いのは、恐らくそうしたジャウ・ファラの位置と無関係ではない。同じ黒人として、同じ労働者として、彼の心に連帯意識が芽生えないわけではないが、その世界は、所詮、彼にとって脱出すべき世界であり、それも一人[・]で脱出すべき世界なのだ。

そうしてみれば『黒人沖仲仕』はジャウ・ファラというアフリカ黒人青年の個のドラマとして書かれていることが解る。しかし、彼が遭遇する問題はことごとく人種の問題であり、積年の植民地主義の問題であって、一個人の運命ないしは性格の悲劇⁽¹²⁾として扱っては解けない問題である。そこに設定されている主人公の生き方はそうした根本にある問題の社会性に対してあまりに無批判的でありすぎる。たとえば彼は、小説家として認められ、マルセイユのゲットーを脱出したあかつきには、一体どのような世界へ入っていくことになるのか、それは本当に彼の[・]世界[・]なのかという点について無自覚にすぎるだろう。『黒人沖仲仕』の小説としての破綻は、結局、それをジャウ・ファラという一黒人青年の挫折の物語として読むには、青年の社会意識が未熟で貧しすぎ、挫折に至る内的論理性に欠けているし、エピローグに主張されているような人種偏見や植民地主義の告発の書として読むには、主人公の状況へのコミットがあまりに稀薄で、全体としてトリヴィアルな個人史への関心に焦点が絞られすぎているところに存すると言えるだろう。

3

センベヌの第二作『おお祖国よ、わがうるわしき民よ』*O pays, mon beau peuple!*⁽¹³⁾ は、一転して、祖国復帰の物語である。処女作発表の翌年に上梓されているので、執筆の時期は重なると思われるが、祖国の大地と人間を描く筆は前作とは比較にならないほど潤達である。

物語は長年の不在のあと、22才の若いフランス人妻をつれて故郷カザマンズに帰ってくるウマル・ファイエ Oumar Faye というセネガル青年の行動の軌跡と周囲の人々に投げかける波紋をめぐって展開する。

第一部では勝手に白人妻をつれて帰ってきた息子に対する家長ムッサ・ファイエと母親（ムッサの最初の妻）ロカイヤ・ゲイエの愛憎の確執が描かれる。父親はイスラム教の導師（imam）であり、一夫多妻主義者で三人の妻を持っている。

……人々は彼を導師としてばかりでなく、^{よわい} 齢を重ねてきた年長者としても敬っていた。日に5度、彼は信者たちの礼拝を司った。彼にとって、すべてはコーランに述べられていた。そして一切の判断と助言を聖典から汲み取っていた。彼は厳格で、ときに非情にすら思われることがあったが、皆から愛されていて、しばしばめごとの裁定に彼の叡智が求められた。彼が妻を三人持っていることは、信者たちの眼に、ますます尊敬すべき人物と映じさせた。ムッサ・ファイエ老人は自らの信念に従って、家内をとりしきっていた。妻たちの間にいさかいはけっしてなかった。三人の妻はそれぞれ順に夫婦の床に身を横たえた。最初の妻ロカイヤ・ゲイエには息子のウマル・ファイエ以外に子供がなかった。だから〔ウマルが白人の妻をつれて帰ってくるという〕ニュースは、他のだれよりも彼女にとって大きなショックだった。彼女はすでに息子の嫁を決めていたのではなかったか？娘の家族になんて言ったらいいだろう？最初の妻といっても、ロカイヤ・ゲイエは他の妻たちに比べてなんの特権も持っていなかった。

二番目の妻アミナータは二人の息子と一人の娘の母親だった。最後の妻ファトゥには二人の娘がいた。三人の妻はウマルに対して平等の母権を持っていたが、息子の結婚を知って苦しんでいたのは実の母親⁽¹⁴⁾だけだった。

ウマルが白人妻をつれてきたことに対する反応は、父親と母親では自ずから違っ

ていた。父親の懸念は回教徒としての戒律を潔癖に守りながら、自分なりに平和に治めている家庭に、異教徒の嫁が入りこんできて秩序をかき乱すことだった。息子が家長の自分に相談もせず、勝手に、「自分たちを搾取することしか考えないような奴ら⁽¹⁵⁾と同じ人種の娘を妻にしたことも腹にすえかねるが、さりとて、帰ってきた息子を放りだせば立派な回教徒としての名前に傷がつく……。息子が家についた明くる日、息子を礼拝室に呼んだムッサは言う。

—ところで、おまえは婚礼の日に母親のことを考えたか？

—ええ、ものすごく。

—それなら、おまえの良心はおまえになんて言った？

(・・・)

—おまえは今ではもう自分の翼で飛べる大人だ……わしの娘は絶対に白人などに嫁ぐことはないだろう。おまえは自分のしたことがいいことだと思っているのか？ ええ？ おまえたちはここでどうやって暮していくのだ？ とうもろこしを食べていけるのか？ おまえのつれあいは水汲みに行くだろうか？ あれはきびをつけるかね、それともおまえがかわりにやってやるのか？ これからはテーブルについて食事をするというわけにはいかないぞ。台所は一つだし、料理は一皿だからな。まあそれでも、あれがわたちを見下さないのなら、白い手を共同の皿につっこむこともできようが……⁽¹⁶⁾

一方、母親の反応はもっと直截で、感情的である。息子の帰宅する前日、食事の時に彼女の口から洩れ出る言葉が象徴的である。

あの子がこんなことをするんだったら、戦争で死んでくれた方がよかったよ。もし……もしこうなると解っていたら、この手であの子を絞め殺してやるんだった。⁽¹⁷⁾

そして、先に引用した父親との対決のあと、父母の家を出て、自分の家を持つと決意する息子に向って、母親の思いは千々に乱れ、哀願してなんとか息子を自分のそばに引きとめようとする。

—どうしておまえはわたしにこんな仕打ちをするんだい、え？ なぜだい？

(・・・)

—だれかがおまえに腹が立つようなことを言ったのかい？ おまえをばかにし

たようなことでもしたのかい？ それともおまえのつれあいがそうしたいと言うのかい？ 一体どういうことなんだい……

(・・・)

—家が小さすぎるのかい？ ……おまえのつれあいに比べると、かあさんがみっともないからかい？ わたしが着物をきちんと着ないからかい？ ああ、それなら、おまえの気に入るように、きちんと着るようにするよ、清潔にもするよ……靴だてはくよ、トッパブ（白人）の国じゃみんなはいているって言うからね。おまえたちの食事の給仕もしよう。おまえたちの召使いになるよ……だから行かないでくれ。⁽¹⁸⁾

ウマルは盲目的な愛情をぶつけてくる母親に心をゆさぶられるが、家を出て行く決心は変わらない。切羽つまった母親はついに呪詛の言葉を口にする。

—おまえのつれあいが憎い！ おまえの仲間がみんな憎い！ あいつらが生きている限り、わたしにはもう気が安まるときがないだろう。わたしが東を向いて、そこからお天道さまが姿を現わす限り、わたしはけして心の安まるときがないだろう。あいつらがおまえをわたしから奪ってしまったんだ……⁽¹⁹⁾

ウマルがフランス人妻をつれて帰ったことに対する反応は、しかし、単に肉親の感情のもつれにとどまらない。父親ムッサ・ファイエをとりまく信仰心の厚い老人たちの間では、アラーに捧げる祈りの合間にこんな会話が交される。

—わしは1914—18年の戦争に行った。(・・・) 白状すれば、わしだって色々なトッパブの女と関係を持ったさ。男はどこに行ったってやっぱり男だからな。だが、正真正銘、そういった女たちの一人と結婚しようとか、ここまでつれてこようなどとはけして思わなかったな……

—ただなあ、あんた、あんたの言うことが正しいことは解るが、わしが生まれたソブーラ・サルームにまだ王様がいた時分には、男が戦争に出かけるとなれば、みんな女奴隷をつれて帰ることを約束したもんだ。ウマルの体にはそうしたファイエの血が流れてることも認めなきゃならん。⁽²⁰⁾

あるいはまた、ロカイヤ・ゲイエが息子の嫁にと決めていた娘の家で、挨拶に訪れ

たウマールに投げつけられる娘の母親の言葉も根が深い。

— アイダ〔娘の名〕、と母親は呼んだ。さあ、おまえのどんな様に挨拶においで。

(・・・)

ウマールは意を決して言った。

— お二人には申し訳ありませんが、わたしはアイダとは結婚できません。

— ふたまたはかけたくないと言うのかい、と母親は語気を荒げて言った。トッパブの国でそう教えられたのかい？ それならすべての枝が鳥のためにあるわけじゃないってことをおぼえておくんだね。それともおまえはまた向こうへ帰る気なのかい？⁽²¹⁾

さらにウマールと同世代の若者たちの間でも評価は厳しい。たとえば仲間うちで「道楽者」として通っている保守派のドゥライエ・ディアニュは言う。

— いったいなにを考えて、あいつは女をこんなところまでつれてきたんだろう？ ダカールとかサン・ルイならまだしも……おやじさんはごきげんななめだ(・・・)……おれだったらこんなばかな真似はしないな。

— 結婚するのは、ディアニュ、別にばかなことじゃないよ。

— おれが白人女とかい！ 世界中の金と引換えてもいやだね。うまくやっていけるはずがない。⁽²²⁾

地元のフランス人が経営しているコゾノ商会の運送夫ディエングも言う。

— おれもおまえと同じ意見だ。黒人がここで白人の女と暮していくことはできない……とくに収穫期にその女の同国人が奥地でどんなことをやっているかを考えたらうまくいくはずがない。そこへ、今度は、おれたちの仲間の一人がおれたちの目の前で、白人女とこれみよがしに暮し始めたのだ。あいつは裏切り者だ、それだけのことだ。⁽²³⁾

もちろん、ウマールに理解者がいないわけではない。親族の中にも伯父のアマドゥのように、最初からムッサに「まずは息子の言うことをよく聞いてやるんだな」とと⁽²⁴⁾

りなしてくれ、ウマルが自分の家を持ちたいと申し出たときにも「ムッサ、ウマルの言うのが正しいと思うよ。息子には父親の家しかたよりになるものがない。ウマルがトゥーグール〔フランス〕に居残らなかったことに対して天に感謝せねばなるまい。あんたは息子が『お父さん、僕は自分の家が持ちたい』と言ったら、そのことを誇りに思うべきだ⁽²⁵⁾」と口添えしてくれる人物がいる。若い友人では、雑貨商の息子ジャン・ゴミや医者アグボ、教師セクのように新しいアフリカのあり方を夢見ている連中がウマルの帰郷を好感を持って迎えている。かくして、第一部はウマル夫妻の分家、彼らが「棕櫚林」と名付けた新しい家への転出をもって終るのである。

第二部では「棕櫚林」に新居を定めたあと、アフリカの大地に魅せられたウマルが漁業を代々の家業としてきた慣習にさからって、農業を始めようとする姿が描かれる。冒頭のウマルの大地への執着を語る部分が美しい。

ああ、彼は大地を、この大地を、自分の大地をどんなに愛し、いつくしんだことか！ 彼は大地がねたましかった。彼は大地を、愛し愛されるひとりの女になぞらえた。木々は彼女の髪で、土は肉体、石は骨、川は血、泉は目だった。熟れた果実は口、丘々は乳房だ。彼は彼女の抗らい、あきらめ、ついにはかき抱く手や腕を想像裡に描いた。森は彼女の神秘の茂みにして膝、彼女の強さと弱さだ。彼女の声は風、雷あるいは夜の甘いささやきだ。

それは良き母、善良な女だ。しかし時に彼女は反抗する。なぜなら小さなコンコ〔唐楸〕の激しい乱打を彼女は愛するからだ。⁽²⁶⁾

漁師の子孫が農民になることに対する周囲の抵抗、資金作りや人集めの困難、反動的なウマルに対する白人仲買人（前記コゾノ商会に代表される）たちからの圧力、そして待ちのぞまれた雨期の到来と倍加する農作業。波乱に富んだ第二部の圧巻は、イザベルが夫の不在中におしかけてきたコゾノ商会のフランス人たちに侮辱され、あげくのはてに暴行されそうになった事件のあとで、フランスに帰りましようと言った時、それに対して答えたウマルの言葉であろう。

——フランスへ帰るって？ なにを言ってるんだ。おまえにも少し解ってほしいことがある。……戦争前まで、僕はなにも知らなかった。毎日がその日暮しで、すべての計画は日が沈めばそれでおしまいだった。そして動員だ。敵はドイツ人だっ

た。僕はドイツ人を憎み、彼らと戦うことを教えられた。雨が降ろうが、雪が降ろうが戦わなければならなかった。四年間、僕はあらゆる国籍の人間と肩を並べて暮した。同じ食糧を分け合い、同じ弾をよけ、ともに笑い、ともに泣いた……そして戦争が終ると、われわれは苦勞して勝ち取った勝利を歡喜して祝ったものだ。普遍的な自由を勝ち取ったのだと思って。

(・・・)

—ある日、その勝利の日から一年経った時だ、かつて一緒に戦ったある男がこんなふうと言った。「おれたちがいなかったら、おまえたちはどうなったろう、植民地は今ごろどうなっているだろう？」 戦勝記念日の日に言われたこの言葉に僕は愕然となった。そして悟ったのだ。自分たちは祖国のない人間、無国籍者なのだということを。他人が「われわれの植民地」などと言うとき、僕らはどう言ったらいいのだ？ それでもおまえは僕が出て行くことをのぞむのか？ 出て行くとしても一体どこへ行けばいいのだ？ よそへ行って僕はなにをやればいいのだ？ いいかい、僕は今、自分の国にいるのだ。もし僕がここで人から尊敬してもらうことができないうなら、僕の名譽などなんの意味があろう？ 人間の尊嚴はたんに子孫をつくることではないし、きれいな着物を着ることもない。それは祖国でもあるのだ。

(・・・) 屈辱がどんなものかは僕にもよく解る。おまえがどんなに苦しんでいるかも僕はよく解っているつもりだ。しかし、僕は、どこに人間としての尊嚴を見出したらいいのだ？ 僕が生まれたこの国でないとしたら、一体どこに？ 僕は出て行くことはできないし、絶対に出て行かないだろう。僕がおまえに言えるただ一つのことは、おまえが帰りたいなら、無理に居残る必要はないということだ。⁽²⁷⁾

そうしてウマールはますます農耕に熱中し、祖国の大地に精魂をふりそそぐ。⁽²⁸⁾ 第二部は、過勞のあまり熱病に倒れたウマールが50日ほど病の床に就いたあと回復し、病気の回復を祝って、7月14日〔フランス革命記念日〕の前夜に町中の人々を招待しての舞踏会の場面で終る。イザベルの暴行未遂事件に象徴される未来への一抹の不安を残しながらも、収穫の期待と新生の予兆に満ちた幕切れである。

そして第三部はウマールの夢と死である。

夢はつねに無償ではない。それはアフリカの自然がときに見せる異常な暴力と死にもの狂いで格闘したあとに自ずからふくらんだ夢であるが、あまりに美しすぎる夢であるが故に、ウマールはその代価を支払うことになる。それが彼の死だ。

雨期が終り、祭りが終り、収穫が待ちのぞまれていたある日、それは突然襲って来た。

ある日（・・・）みわたす限りの大地から一切が消えた。芽生えはあとかたもなく消えてしまっていた。あとにはうようよとうごめく黒い流れが四方八方に恐ろしい勢いで広がっていくばかりだった。破壊力をひめたその塊は^{マフス}良い芽も悪い芽もすべて食い尽した。根っ子の皮まで食い破り、一切を荒廃させた。ぬれたジャスミンのかすかな芳香はむかむかするような腐臭に変わった。伝染病よりも恐ろしい幼虫が大地から無数に湧き出てきたのだ。一朝にして、幼虫たちは何週間にもわたる労働の結晶を喰いつくしてしまっていた。⁽²⁹⁾

ばった⁽³⁰⁾（cricket）の幼虫の大発生である。

ウマールは農民たちを組織し、「戦いを続けるべきか、全能の神のおぼしめしに身を委ねるべきか」⁽³¹⁾動揺する老人たちを叱咤しながら、幼虫退治に寝食を忘れる。応援の人手を求めて、植民地行政官のところへ援助を申し出に赴き、囚人たちを送りこんでもらう約束もとつけた。そうしてついに虫が退治されると、間髪をいれず、ウマールは農民たちに提案する。すぐ種をまけば、まだ収穫ののぞみがある、種はわたしが無償で提供しよう、と。とまどう農民たちは長い間相談したあげく、ウマールの提案に従うことにする。ただし、彼は種を無償で提供するについて条件を一つつけた。それは「わたし以外のだれにも収穫物を売りわたさない」⁽³²⁾ということであった。そこからウマールの夢がふくらむのだ。ジガンショー唯一のアフリカ人経営の商店であるゴミ商店のパパ・ゴミに彼は自分の構想を打ち明け協力を求める。

僕はみんなの利益になるような模範農場を作りたいんです。今日ここへ来たのはあなたが僕に協力してくれるかどうかを知るためです。大切なのは、誰か有能な人が仕事をみてくれることです。はじめは僕の伯父さんのことも考えましたが、伯父さんにはどうして僕が伯父さんをこういう仕事にひっぱって行こうとするのか解ってもらえないでしょう。ここに来る前に、ジャン〔前出。パパ・ゴミの次男坊〕と話をしました。彼は賛成です。われわれは販売部を持った農業組合を作ろうと思っているんです。組合は農民たちに対して責任を持ち、彼らの利益を守ります。これからはもう小麦の値段を外からおしつけられるようなことがあってはならない。われわれが相談して決められるようではなくてはいけません。来年は犁が^{すき}二台導入され

るでしょう。その次にはトラクターも一台購入するつもりです。御存知のように、われわれの国では年長者が先に立って歩くのがしきたりです。⁽³³⁾

話をもちかけられたパパ・ゴミはフランス人たちが経営する大商會が、彼らの言い値で農民たちの作物を買い占めている植民地の現実の中で、ウマルの提案がいかに危険思想であるかを見通している。しかも二日もすると、だれが口をすべらせたのか、協同組合を作る話はたちまち巷間にひろがった。一夕、ウマルは妻のイザベルとチェスをしながら、しばし美しい夢にふけたあとで呟く、「こんなことを夢見るのはまだ早すぎる」と。そしてその晩ウマルはなにものかが助けを求めるような声にさそい出されて、しのつく雨の中を懐中電灯片手に見まわりに出たまま二度と戻らなかった。闇の中でなにものとも知れぬ数人の者に襲われ、惨殺されたのである。

*

『おお祖国よ、わがうるわしの民よ』は、このように、独立前夜のアフリカで、抗い難くおしよせる新しい時代の波を敏感に肌で感じ取り、時代に先がけてその波に身を投じた青年の生と死の物語である。前作では主人公の属する世界とそこから逃れ出ようとするベクトルが指示する世界がちぐはぐで、有機的に結びついていなかったため、小説的リアリティーを著しく欠いていた。『おお祖国よ……』では、それら二つの世界が同心円的であることによって、構造的厚みを獲得し、小説的虚構世界のリアリティーを作りだすことに成功している。さらに主人公の状況へのコミットが疑いなく真正であることによって、小説空間が美しく緊張しているのである。

またセンベヌは、この小説を書くことによって多くのことを学んだように思われる。祖国復帰の熱い思いにつらぬかれた青年の眼を通して、あらためて現代アフリカを見つめなおすことによって、彼は単にそこに外から持ちこまれた植民地主義の悪弊をみるばかりでなく、アフリカ自体が内部にはらんでいる様々な問題、たとえばイスラム教や土着信仰における狂信の問題や女性の地位の問題に目を向けた。そうした問題は他のもろもろの問題と共に、やがて独立する新生アフリカにおいて顕在化し、肥大化していく問題である。今日センベヌが作家として、映画人として、鋭い体制批判者でありつづけているとすれば、それは彼がつとにそうした内側からの批判精神にめざめていたからであろう。

『おお祖国よ……』には、それとは別に、一人の作家が生涯のある時期にしか書けないような青春小説といったおもむきがある。その後大きく成長するセンベヌにとっ

て、この小説は最良の作品ではないが、その清新な筆致と若々しい熱気によって他に抜きん出た作品である。ただまさに青春小説であることによって、あまりに純粋で直情的な主人公の息使いが、社会主義的連帯によるアフリカの新生という構図の中で、言わば純粹培養されて全篇をおおっているため、いま一つアフリカの大衆の本当の息使いというものが伝わってこないうらみがある。そして次作『神の木っ端たち』が伝えてくるものは、まさに、そうしたアフリカ大衆の息使いであり、彼らの日常生活のリズムなのである。

〔続く〕

注

1. センベヌ・ウスマン Sembène Ousmane という呼び方はアフリカ式で、センベヌが姓、ウスマンが名である。従って欧米の印刷物にもまみられる「作家ウスマン」「ウスマン監督」という言い方は正しくない。この点については『郵便為替』 *Le Mandat* の邦訳者片岡幸彦氏もそのあと書きで指摘しておられるが、1984年訪日した際の記者会見の席でも確認されている。またセンベヌはフランス綴りからするとサンベヌも可であるが、実際発音される音に従えばセンベヌが正しい。
2. ジガンショールは Ziguinchor と記される。日本語表記はセネガル事情に詳しい本城靖久氏（『セネガルのお雇い日本人』、中公文庫、1983）に従った。
3. *Cinéma 76*, n° 208, avril 1978.
4. Paulin Soumanou Vieyra, *Sembène Ousmane Cinéaste*, Ed. Présence Africaine 1972. 以下の伝記的記述は大部分この書に負っている。
5. 1984年2月の訪日に際して国際交流基金に提出された履歴書の学歴のところには「独学者 (autodidacte)」と記されている。
6. Paulin Soumanou Vieyra, p. 16.
7. 『エミタイのウスマン・センベヌ監督に聞く』、キネマ旬報、1984年4月上旬号、91頁（翻訳・岩波律子）
8. この間の事情の詳細は日本セネガル協会編『レオポール・セダール・サンゴール詩集』（恒川・菅波共訳）の巻末付録「レオポール・セダール・サンゴール小伝」（恒川）参照。
9. 1956年にドブレス社 (Editions Debresse) から自費出版される。現在入手できる版は *Le Docker noir*, Ed. Présence Africaine, 1973. 邦訳なし。
10. *Le Docker noir*, pp. 189~190.
11. *Ibid.*, pp. 104~105.
12. ジャウ・ファラが女流作家の殺人容疑で捕えられるに至る過程を単純に主人公の激しやすい性格に帰すことはできないが、処女作から第3作にいたるまで、センベヌの小説の主人公はつねに激しやすい性格の若者として描かれている。そこには若き日の作者の姿の投影が

あると考えられるが、その事に関連して『黒人神仲仕』に興味深い一節があるので、以下に引用する。

「この南仏のアフリカともいうべき地区には、アフリカのあらゆる土地、あらゆる民族の出身者が住んでいた。彼らは故郷の慣習を忠実に守っているため、各々土地別にたまり場を形成していた。たまり場とは居酒屋である。さまざまな偏見や奇矯な振舞いがしばしば争いのたねとなった。

サラコレ族がいた。彼らはもっとも数が多く、航海以外に人生はないといった連中で、おしゃべりで、やかましく、なりふりかまわず、それでいて一番保守的な連中でもあった。

スースー族の連中は生まれつき狡猾で、片意地悪く、臆病だ。マンダング族は静かで重くろしい。トゥクラール族は身のこなしが際立って優雅である。彼らは征服者エル・ハジ・オマールの未裔なのだ……。マンディアグ族とディオラ族は酒好きなので『アフリカのブルトン人』と綿名されている。バンバラ族は戦士だ。黒人兵の勇猛さは彼らなしには考えられない。彼らはまた商人でもあり、疲れを知らない健脚家であり、なによりも信心厚い物神崇拜者である。彼らは何千里も離れたところから呪いをかける能力を持っているということで、他の部族の者から恐れられている。数は少ないが落ち着いていて分別のあるダホメ人、その他、マルティニック人、モール人……そしてウォロフ族だ。激しやすく、抜け目なく、悪賢い。彼らははっきりとした起源を持たない。アフリカのすべての民族の混血なのだ。彼らの綿名は『黒人コルシカ人』だ。彼らの行動は極端から極端へ走る。小猫のように大人しいかと思えば、火山のように激する。

ジャウ・ファラもそうした連中の一人である……」

13. 1957年アミオ・デュモン社 (Amiot-Dumont) から刊行される。現在入手できる版は Presses Pocket, 1975. 引用はすべてこの版による。

なお藤井一行氏による邦訳 (『セネガルの息子』) があるが、訳者あとがきに記されているように、邦訳はロシア語版からの重訳である。訳者によればフランス語の原典とロシア語訳を比較すると「ロシア語版は必ずしも原著に忠実でなく、かつかなりの頁にわたって削除があることが判明した」そうである。本稿の引用はすべてフランス語の原典によるが、翻訳に際しては藤井氏訳を参考にさせていただいたことを付記しておく。

14. *O pays, mon beau peuple !*, pp 15~16.
 15. *Ibid.*, p. 26.
 16. *Ibid.*, pp. 43~44.
 17. *Ibid.*, p. 22.
 18. *Ibid.*, pp. 47~48.
 19. *Ibid.*, p. 49.
 20. *Ibid.*, p. 20.
 21. *Ibid.*, p. 33.
 22. *Ibid.*, pp. 35~36.
 23. *Ibid.*, p. 36.
 24. *Ibid.*, p. 26.

25. *Ibid.*, p. 45.
26. *Ibid.*, pp. 75~76.
27. *Ibid.*, pp. 116~117.
28. Cf. *Ibid.*, p. 121. 「『おお祖国よ、わがうるわしき民よ』とウマールを土を踏みしめながら歌っていた。」原作の題名はこの一節からとられている。藤井氏訳のロシア語版では前出のウマールがイザベルに語る言葉の中に「人間は自分の祖国の息子でなければならない」という文句があることになっていて、それがまた小説の題名『セネガルの息子』につながるように読める。しかし実際はその様な表現は原典にはない。『セネガルの息子』という表題はロシア語訳の表題を踏襲したものであることが藤井氏の解説で解るが、だとすればアメリカの黒人作家リチャード・ライトの小説『アメリカの息子』 *Native son* になぞらえた命名であろうか。
29. *Ibid.*, pp. 145~146.
30. *Ibid.*, p. 148.
31. *Ibid.*, p. 148.
32. *Ibid.*, p. 156.
33. *Ibid.*, p. 175.
34. *Ibid.*, p. 178.